

要介護高齢者に対する作業療法の効果

—ランダム化クロスオーバー研究—

Effect of occupational therapy for care requiring elderly

—a randomized crossover study—

○能登真一 (OT)¹⁾, 泉 良太 (OT)¹⁾, 上村隆元 (Dr.)²⁾

¹⁾新潟医療福祉大学医療技術学部作業療法学科, ²⁾杏林大学医学部衛生学公衆衛生学教室

Key words: 作業療法, 介護保険, QOL

【背景と目的】高齢化が進み、介護保険下での作業療法のニーズや期待が飛躍的に高まっている。OT協会も作業療法5カ年戦略の中で重点的スローガン「地域生活移行支援の推進～作業療法5(GO)・5(GO)計画～」を掲げ、その中で高齢領域への各種目標を明記している。また近年は介護保険領域に就職する作業療法士も格段に増加している。われわれはこの領域での作業療法の効果を決して疑わないが、どのような効果があるのか、あるいはどのような指標でそれらが証明できるのか、優れた研究デザインを用いて明らかにできていない。そこで本研究では、要介護高齢者に対する作業療法の効果を多施設間のランダム化クロスオーバー研究によって理学療法と比較、検証した。

【方法】全国の6つの介護保険施設に入所、通所、あるいは訪問により作業療法を受けている要介護高齢者106名をランダムに2群に分け、一方に作業療法的介入を、もう一方には理学療法的介入を行った。介入方法は2～3ヶ月後に入れ替えた(クロスオーバー)。作業療法的介入として認知課題、ADL・IADL練習、余暇活動の提供、環境調整などを実施し、理学療法的介入としては筋力トレーニング、移動訓練、物理療法などを実施した。アウトカム指標は握力、MMSE、FIM、Health Utilities Index (HUI)、EuroQol (EQ-5D)、Dementia QOL (DQOL: 自尊感情、肯定的感情、否定的感情、所属感、美的感覚)とした。統計処理はWilcoxonの符号付き順位検定を用い、5%を有意水準とした。研究の対象者には口頭で説明を行った上で、書面による同意を得た。

【結果】対象者は介入方法入れ替え時に3名、最終評価までに9名が脱落し、最終的に作業療法(OT)群98名、理学療法(PT)群97名となった。それぞれの平均年齢は82.8歳、82.5歳で、女性の割合はそれぞれ74.5%、75.3%であった。要介護度は要介護2が34名、要介護1が25名、要介護3が20名の順に多くなった。アウトカム指標の変化について、FIMはOT群で87.2→88.7 ($p=0.002$)、PT群で86.5→87.1 ($p=0.006$)となり両群で有意な改善を認めたほか、DQOLの否定的感情と所属感においても両群に有意な改善を認めた。一方、HUIではOT群が0.176→0.203 ($p<0.001$)、PT群が0.186→0.195 ($p=0.075$)となりOT群にのみ有意な改善を認めたほか、DQOLの美的感覚についてもOT群のみに改善を認めた。また握力、MMSE、EQ-5D、DQOLの自尊感情と肯定的情動には両群とも有意な改善は認められなかった。

【考察】本研究では要介護高齢者に対する作業療法の効果として、ADL指標であるFIMと健康関連QOLの一部の指標に改善を認めた。とくに、HUIとDQOLの美的感覚についてはOT群のみでその改善が得られ、この領域での作業療法の効果の一部を明らかにすることができた。もちろんこのことは要介護高齢者に対する理学療法や機能訓練を否定するものではなく、職種間連携をもとに、作業療法の特性を生かしたアプローチが必要であることを示唆するものである。さらに、効果を表現しにくかった高齢領域の効果判定に健康関連QOLの指標が役立つことは今後の研究の発展を考えた上でも意義のあることと考えられた。